

一 ツバメの巣

ぼくの家のげんかんの上には、古いツバメの巣がある。ぼくが生まれる前から、春になると、ツバメが毎年この巣にもどってくるのだ。

ところが今年は、四月の半ばをすぎても、ツバメは来なかった。ぼくは毎朝、学校へ行く前に巣を見上げた。巣はからっぽのまま、ふちのどろが少しくずれかけていた。

「今年は、ほかの場所に決めたのかもしれないね」

母がそう言ったのは、五月の連休が終わった日の夕方だった。

「……まだ、わからないよ」

ぼくはそう答えたけれど、声はだんだん小さくなった。去年は、巣の下に新聞紙をしいて、ひなのふんを受けた。五羽のひなが黄色い口を大きく開けて、親鳥にえさをねだっていた。巣立ちの日には、五羽そろって電線にならび、ぼくの方を見下ろしていた。

学校でも、ぼくは休み時間のたびに、まどから空を見た。ツバメにいた鳥が飛ぶと、つい目で追ってしまう。けれども、よく見ると、どれもスズメかカラスだった。

その夜、ぼくは去年とった写真を見返した。巣のふちに、ひながぎょうぎよくならんでいる。ぼくはがっかりして、写真をつくえの引き出しにしまった。雨の音が、いつまでも屋根を打っていた。

次の朝は、雨が上がっていた。ぼくはもう、巣を見上げないことにした。くつをはいて、げんかんの戸を開けたときだった。

頭の上で、チュピ、チュピ、と高い声があった。

ぼくは、その場で動けなくなった。そつと見上げると、巣のふちに、黒いせなかの鳥がとまっている。白いおなかに、長くわかれたしっぽ。もう一羽が、ぼくの頭のすぐ上を、すつとかすめていった。

「お母さん、来た。ツバメが来たよ」

ぼくは家の中に向かってきけんだ。自分でもおどろくほど、声はずんでいた。母がエプロンのま、げんかんに出てきた。

「あら、本当。ずいぶんおそかったね。遠くから、がんばって飛んできたのね」

ツバメは、くちばしにどろをくわえて、くずれかけた巣のふちに何度もぬりつけている。古い巣を、直しているのだ。その様子を見ているうちに、体のおくから喜びがこみ上げてきた。ぼくは思わず、その場でとびはねた。

それなのに、鼻のおくがつんとした。ゆうべ、もう来ないとあきらめかけた自分が、少しはずかしかった。

「ほら、航^{わたる}、ちこくするよ」

母にかたをたたかれて、ぼくは走り出した。角を曲がる前にふり返ると、朝の光の中で、二羽のツバメが巣のまわりを回っていた。ぼくは学校まで、一度も止まらずに走った。

一 ツバメの巣 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

二 おすすめカード

図書委員になって、一か月がたった。仕事は、昼休みのカウンター当番と、おすすめの本のカードを作ることだ。

委員は、くじ引きで決まった。本当は、運動会の係になりたかった。

カードは、はがきくらいの紙に、本の題名とみじかいしようないを書く。わたしは二年生のころに何度も読んだ、ねこが旅をする話を選んだ。色えんぴつでねこの絵もかいて、本だなの横にはった。

けれども、二週間たつても、その本はだれにも借りられなかった。カードの前を、みんなはちらりとも見ずに通りすぎていく。当番のたびにたなを見たが、本はいつも同じ場所に、きちんと立ったままだった。

「カードなんて、だれも見えてないと思います」

当番の日、わたしは返された本を箱から出しながら、司書の先生に言った。わざと、つまらなそうな声を出した。

「そうかな。見ている人は、ちゃんと見ていると思うけどな」

先生はそう言ったけれど、わたしは返事をしなかった。ほかの委員のカードは、人気のまんがやクイズの本ばかりだ。わたしのカードだけが、なんだか地味に見えた。

次の当番の日だった。カウンターに、小さな男の子が本を一さつ持ってきた。男の子は本を両手でのせて、背のびをしていた。名札を見ると、一年生だった。わたしがカードを作った、ねこの本だった。

「これ、借ります」

わたしはバーコードを読みとりながら、思わず聞いた。

「この本、どうして選んだの」

男の子は、本だなの横を指さした。

「あのねこの絵、かわいかったから。お姉ちゃん、あの絵をかいた人、知ってる」

わたしは、すぐには答えられなかった。先生が後ろから来て、わたしのかたに手を置いた。

「このお姉さんがかいたのよ。図書委員さんなの」

「すごい。ぼく、ねこ大好き。読んだら、またほかのも教えてね」

男の子は本を両手でかかえて、ろうかへかけ出していった。わたしは、その小さなせなが見えなくなるまで見送った。顔がほてって、耳まで熱い。少しはずかしいのに、口のはしが勝手に上がってくる。

「ほらね」

先生が、につこり笑った。

当番が終わるまでに、わたしは何度も本だなの横のカードをながめた。ねこの絵は、少しゆがんでいる。それでも、きのうよりずっと上手に見えた。

わたしはカウンターの下から、新しい画用紙を三枚取り出した。せすじをのばして本だなの前に立つと、まどから日がさしこんで、ならんだ本が明るく光って見えた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

三 夏祭りの夜

夏祭りの夜、美月^{みづき}は妹の小春^{こはる}と手をつないで、神社の参道を歩いていた。

道の両側には屋台がならび、ちょうちんの明かりが、ずっと先までつづいている。わたあめや焼きそばのにおいがして、小春は金魚のがらのゆかたのそでをふって、何度も立ち止まった。

「お姉ちゃん、金魚すくい、やりたい」

「あとでね。お母さんと、とりの前で待ち合わせしてるんだから」

美月は、小春の手を引いた。母からは、ぜつたいに手をはなさないように、と言われていた。

そのとき、おみこしが通るぞ、という声が出て、人のなみがどつと横に流れた。おされた美月は、思わず手をはなした。ふり返ると、すぐ後ろにいたはずの小春のすがたがない。

「小春」

美月はさげんだが、声はたいこの音にかき消された。まわりは知らない人のせなかばかりで、ゆかたの色がぐるぐる回って見える。のどが、からからにかわいた。どこかで子どもの泣き声がするたびに、美月はふり向いた。けれども、それはいつも知らない子だった。

金魚すくいの屋台まで走ったが、小春はいなかった。わたあめの店にも、いない。自分が手をはなしたせいだ。母の顔が、頭にうかんだ。美月は、からつぽの手を強くにぎりしめた。

そのとき、近くのスピーカーから放送が流れた。

「まいごのお知らせです。金魚のがらのゆかたを着た、小春ちゃんという女の子を、本部のテントであずかっています。お姉さんの美月さん、本部まで来てください」

美月は、人のあいだをぬうようにして走った。本部のテントの下で、小春がパイプいすにすわり、ラムネのびんをかかえていた。目のまわりが赤い。

「お姉ちゃん」

小春がいすからとびおりて、美月のこしにしがみついていた。その小さな体のあたたかさを感じたとたん、美月のひざから力がぬけた。はりつめていたものがゆるんで、深い安心が、足もとからじわじわと広がっていった。

「どこに行つてたの。すごく、さがしたんだからね」

言つたとたんに、声がふるえた。おこりたいのか泣きたいのか、美月は自分でもわからなかった。

「ごめんなさい。金魚を見てたら、お姉ちゃんがいなくなつてたの」

美月は、小春の手をにぎり直した。今度は、指と指をしつかりからめた。テントの外では、たいこの音がいつのまにか遠くなり、ちょうちんの明かりが、さつきよりもやわらかく見えた。

「金魚すくい、お母さんに会ったら、三人でやろうか」

小春はぬれたまつげのまま、こくりとうなずいた。

三 夏祭りの夜 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

四 雪の朝の道

交差点には毎朝、黄色い旗を持ったおじいさんが立っている。登校する子どもたちを見守ってくれる、近所の人だ。

「おはよう。今日も寒いな」

翔太は、小さく頭を下げてただけで、その前を通りすぎた。おじいさんは、だれにでも大きな声で話しかける。手ぶくろはどうした、ランドセルのふたが開いているぞ、と毎日のように言われる。それで翔太は、おじいさんのことが少しうつとうしかった。

ある日、夜のあいだに大雪がふった。次の朝、翔太は生き物係の当番で、いつもより一時間早く家を出た。

外はまだうす暗く、道は一面まっ白だった。道ぞいの家は、まだどこも明かりがついていない。足をふみ出すと、長ぐつがひざの近くまでしずんだ。翔太は息を止めるようにして、一歩ずつ進んだ。

ところが、角を曲がったとたん、足もとが急に軽くなった。学校の方へ向かって、人が一人通れるはばだけ、歩道の雪がまっすぐにかいてあったのだ。

その先で、だれかがスコップを動かしていた。白い息をはきながら、こしをのぼしては、また雪をすくう。黄色い旗が、電柱に立てかけてあった。

「おじいさん……」

おじいさんはふり向いて、目を丸くした。

「なんだ、ずいぶん早いな。こっちはまだ半分だ。小さい子が転ぶといかんからな」

おじいさんのぼうしにも、まゆげにも、雪がうつすらとつもっていた。いったい、いつからここにいたのだろう。翔太は、今歩いてきた道をふり返った。かいたばかりの細い道が、ずっと向こうまでつづいていた。

翔太はしばらく、何も言えなかった。毎朝、頭を下げるだけで通りすぎていた自分のすがたが、目にかんだ。はずかしくて、耳が熱くなった。

翔太はランドセルを雪の上におろした。おじいさんの足もとに、小さいほうのスコップがもう一本ころがっていた。翔太はそれを、だまって手に取った。

「ぼくも、やります」

「当番に、おくれるぞ」

「まだ、時間はあります」

二人でならんで、雪をすくっては道のはしに積んだ。手ぶくろの中で指先がじんじんしたが、翔太は手を止めなかった。おじいさんは、ときどき翔太の方を見て、うん、うん、とうなずいた。やがて、東の空がうすい黄色にそまり、かき終えた道が、朝の光の中に白くうかび上がった。

学校の門の前まで来ると、翔太はスコップを返した。そして、おじいさんに向かって、ぼうしを取って深く頭を下げた。

「ありがとうございます。……おはようございます」

おじいさんは一しゅん、きょとんとした。それから、白い歯を見せて笑った。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

五 母の日のオムライス

母の日の夕方、ぼくは台所に立っていた。作るのは、オムライスだ。母には、リビングで休んでいてもらった。

この一週間、父に教わって、三回練習した。たまごは強火で一気に、と父は何度も言った。ぼくはそのたびに、ノートに書きとめた。玉ねぎを切るとなみだが出たし、ケチャップライスは毎回少しこげた。それでも、今日はうまくいく気がしていた。

フライパンにたまごを流しこむと、じゅつと音がした。ここからが、いちばんむずかしい。フライ返しでライスを包もうとしたとき、たまごのまん中が、ぴりつとやぶれた。

「あ……」

やぶれ目から、赤いライスのがのぞいている。ぼくはあせって、上からケチャップをたっぷりかけた。かくそうとすればするほど、形はくずれていった。

「できたの」

「……うん。でも、失敗した」

ぼくは、やぶれ目の小さいほうを母の皿にのせた。いちばんくずれたのは、自分の皿だ。テーブルに置くと、ぼくは母の顔から目をそらした。父が、スプーンを三本ならべてくれた。

母はだまつて一口食べた。もう一口。それから、スプーンを置いて、ぼくの方を向いた。

「おいしい。陸、これ、お店のよりおいしいよ。お母さん、こんなにおいしいオムライス、初めて食べた」

「おおげさだよ。やぶれてるし」

「おおげさじゃないぞ。父さんが教えたときより、ずっとうまくなってる。陸は、手つきがていねいなんだ」

父まで、横からそう言った。

ぼくは急に、顔がかつと熱くなった。耳のうしろまで、じんじんする。何か言い返そうとしたが、言葉が出てこない。ぼくは鼻の頭をこすって、まどの方を向いた。

「……ふつうだよ、こんなの」

わざとぶっきらぼうに言って、自分のオムライスをかきこんだ。ケチャップの味しか、よくわからなかった。父と母が顔を見合わせて、くすくす笑っているのがわかった。

ほめてもらえたのは、うれしかった。それなのに、二人の顔をまともに見られない。口のはしが勝手にゆるんでくるので、ぼくはそれを見られないように、皿に顔を近づけた。

「来年も、作ってくれる」

母の声に、ぼくは顔を上げないまま、小さくうなずいた。

「次は、やぶれないようにする」

ばそつと言うと、父が、たのもしいな、と笑った。皿をあらいながら、ぼくは鼻歌を歌いそうになつて、あわてて口をとじた。まどの外では、夕日がベランダの植木ばちを、赤くそめていた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

六 書道教室

土曜日の書道教室で、千尋^{ちひろ}は、もう二十枚^{まい}目の半紙に向かっていた。来月のコンクールに出す作品の、清書の日だった。千尋がこの教室に通い始めて、三年になる。コンクールに出すのは、今年が初めてだった。

書くのは、大空という二文字だ。何度書いても、空の字の最後の横画が、右へ行くほどふらついてしまう。

となりの席の二年生は、とつくに書き終えて、すずりをあらに行った。

千尋は、書きそこねた半紙をくしゃくしゃに丸めた。丸めた紙が、たたみの上に小さな山を作っている。筆を持つ手に、つい力が入った。次の一枚は、さつきよりもつとひどかった。

「もう、なんで」

千尋は、いらいらして筆を置いた。時計を見ると、教室が終わるまで、あと三十分しかない。

いつのまにか、先生が後ろに来ていた。白いかみの毛を、後ろで一つにまとめたおばあさんの先生だ。

「千尋さん、さつきから、息をしていないでしょう」

「え……」

「横画を引くとき、息を止めているの。息を止めると、筆も止まりたがるのよ。ゆっくり息をはきながら、筆の行きたい方へ行かせてごらんさい」

千尋は、言われたとおりに大きく息をすって、ゆっくりとはいた。すみをふくませた筆を、半紙の上にそつとおろす。まわりの音が、すつと遠のいていった。

大の字を書き、空の字にうつる。最後の横画にさしかかったとき、千尋は細く息をはきながら、筆を右へ運んだ。筆先が、紙の上をすべるように進んでいく。どこまでも行けそうな気がした。

筆をはなすと、教室の中は、しんとしていた。

半紙の上で、大空の二文字が、ゆったりと手足をのばしていた。横画は、最後までまっすぐだった。はらいも、はねも、のびのびとしている。今まで書いたどの一枚とも、ちがっていた。

「ほら、書けたじゃない」

先生の声に、千尋はゆっくりとうなずいた。うまく書けたことよりも、筆と自分の手が一つになったような感じが、うれしかった。千尋は深い満足を感じながら、その一枚をいつまでもながめていた。それなのに、ほんの少しだけ心配にもなった。この感じを、もう一度出せるだろうか。

千尋は、たたみの上の丸めた紙を、一つずつ広げてみた。どの横画も、とちゅうでふるえている。それを見ても、さつきのようないらは、もうわいてこなかった。

ふと顔を上げると、まどの外には、雲一つない空が広がっていた。千尋は書き上げた一枚を、先生といっしょに、そつと新聞紙の上にうつした。

六 書道教室 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

七 流れ星の夜

夏休みも、あと十日で終わりだった。友だちはみんな、海や山へ出かけている。わたしはソファにねころんで、もう三回読んだまんがを、また開いていた。たいくつで、あくびばかり出た。

その日の夕方、仕事から帰ってきた父が、げんかんで大きな声を出した。

「葵、今夜、星を見に行かないか」

「星」

わたしは、まんがを顔の上にのせたまま聞き返した。

「今夜は、流れ星がいちばん多く見える日なんだ。町の明かりがとどかない、山の上の広場まで車で行く。一時間に、四十も五十も流れるかもしれないぞ」

次のしゅんかん、わたしはまんがを放り出して起き上がった。

「何時に出るの」

「夜の十時。帰りはおそくなるから、今のうちに少しねておきなさい」

わたしは部屋にかけこんで、リュックを引っ張り出した。上着、虫よけ、ライト、水とう。入れては出し、出してはまた入れた。本だなおくから星の図かんも見つけ出して、いちばん上にのせた。

ベッドに横になって目をつむっても、まぶたのうらで、光の線が何本も流れていく。わたしは五分おきに、まくらもとの時計を見た。数字は、ちつとも進まなかった。

夕ご飯のあいだも、わたしは何度もまどの外を見た。空には、雲が一つも出ていなかった。十時になる前に、わたしは父より先に、車の後ろの席にすわっていた。

流れ星が見えたら何をおねがいするか、わたしは車の中で、父にずっと話しつつけた。山道をのぼるにつれて、まどの外の明かりが、一つずつ消えていった。広場に書いて車をおりると、思わず声もれた。

「すごい……」

頭の上いっぱい、星がこぼれそうなほど光っていた。町で見る空とは、まるでちがう。虫の声のほかに、何の音もしなかった。

わたしはシートを広げるのもどかしく、あおむけにねころんだ。草のにおいがした。父も、となりに横になった。

「いいか、一か所を見るんじゃないくて、空全体をぼんやりながめているんだ」

わたしは言われたとおりに、空を見つめた。心ぞうの音が、自分の耳にまで聞こえてくる。早く見たいのに、この待っている時間が、ずっとつづいてほしい気もした。

そのとき、空のはしからはしへ、白い光がずっと走った。

「今の、見た」

気がつくと、わたしは父のうでをつかんで、体を起こしていた。自分でもびつくりするくらい、大きな声だった。

「見た見た。ほら、まだまだ来るぞ」

わたしは、もう一度ねころんだ。次の一本を待つあいだ、くつのつま先が、勝手にぱたぱたと動いていた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。
